

[演題 8] 社会福祉援助技術現場実習における「長期実習プログラム」の試み ～学生アンケートを通して長期実習の意義を考える～

阪田 憲二郎、高梨 薫
社会リハビリテーション学科

1. 研究目的

社会福祉援助技術現場実習（以下現場実習）は、ソーシャルワークの価値・知識・技術を指定施設における実践活動から主体的に学ぶところにその意義がある。学生は現場実習から多くのことを学ぶという体験をするが、体験で終わることなくさらに学び深めるためには多くの時間が必要になると考えられる。しかし、現行の法定実習時間数は 180 時間以上となっているもののカリキュラムの都合で実習に法定以上の時間を費やすことは困難となっている。一方、配属実習までの学年においても 1 年次から実習に向けた実習導入プログラム（ボランティア体験など）を設定することによって現場実習がより充実したものとなると考えられる。

このような現場実習に関する課題をふまえて、神戸学院大学総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科（以下本学科）では、1 年次生には「ボランティア実習」を現場実習導入科目として位置づけ、3 年次第 6 セメスターにおいては 360 時間から 540 時間の長期の現場実習を行っている。本発表では、ボランティア実習から長期実習にかけての実習プログラムを示し、実習の導入から現場実習の意義を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

（1）研究の視点：本学における実習プログラムの全体像を示し、とりわけ現場実習の評価を学生のアンケート結果をとおして検討を加え、その成果と課題を明らかにする。

（2）研究の方法：本学科にて現場実習を履修した学生に対し、実習事前指導と実習事後指導の授業（実習の前後）において実習に関する調査を行った。調査の対象となった学生は 2008、2009 年度に実習を行った学生である。

アンケートの主な項目：

事前：①現場実習に関する学習課題の理解度、②現場実習に向けての気持ち、③将来の社会福祉領域への就職についてなど。

事後：①現場実習に関する学習課題の理解度、②現場実習後の気持ちの変化、③将来の社会福祉領域への就職について、④長期の実習への主観的評価

3. 倫理的配慮

調査依頼文には、学生個人が特定できない方法で集計し今後の実習のあり方の参考にするために使用する旨を明記した。結果を公表する場合は個人が特定できないように配慮した。調査結果が成績に反映するものではないことも明記をした。

4. 結果

調査結果の一部を以下に記す。

(1) ボランティア実習と現場実習の関係

①2008 年度に実習を行った学生の場合（n=122）、本学科の実習教育の特徴のひとつであるボランティア実習について、3 年次の実習を終えた後、実習開始前の気持ちがどの

ように変化したかについて尋ねたところ、「ボランティア実習を経験して、福祉現場での実習に自信を持てたと思う」に対し、非常によくあてはまる（12.2%）、かなりあてはまる（29.4%）と、両方で41.8%であった。また「ボランティア実習はいい経験だったと思う」に対しては、非常によくあてはまる（45.9%）、かなりあてはまるが42.9%で9割近くの学生がいい経験だったと捉えていることがわかった。

②次に、本学科が法に定められた社会福祉士受験資格を得るための実習が180時間であるところを、360時間から540時間という長期の実習期間を設定しており、「実際に長期の実習を行ってみて、あなたはどのように思われましたか？」を尋ねた結果、大変良かった（30.9%）、良かった（53.6%）で、良くなかったと答えたのは1%（1名）であった。

③さらに「これからも本学科において長期的な実習を続けていく価値があると思いますか？」と尋ねたところ、（価値があると）思う（80.9%）、（価値があると）思わない（1.1%）、どちらともいえない（18.1%）であった。

(2) 長期実習の評価：自由記載から

①長期実習の良かった点（2期生 60日実習のよかった点 93回答）

- ・ 複数施設の実習により、比較検討することが出来た。
- ・ 利用者との関係性と理解の深まり
- ・ 職員との関係性の深まり、業務や仕事の理解
- ・ 複数の指導者からの指導で、様々な見方やとらえ方について学べた。
- ・ 自己覚知：自分の向き不向き、自分の性格

②長期実習の良くなかった点（2期生 60日実習の良くなかった点 75回答）

- ・ 肉体的、精神的に疲れ、体調維持が大変
- ・ 後半に気の緩み、中だるみ、だらけるなどモチベーションの維持が困難
- ・ 就職活動への取り組みが遅れる
- ・ 交通費、滞在費がかさみ経済的に負担が大きい
- ・ 帰校日を増やして、友達や先生と話をしたかった

(3) 学生アンケート評価のまとめ

①長期実習への導入科目としてボランティア実習については、長期実習の前において半数近くが自信がもてたと答えており、長期実習の後においては過半数が、自信がもてたと答えていた。（長期実習に臨むにあたりボランティア実習の経験が自信に繋がったとの評価が実習後むしろ高くなっていた。）

②またボランティア実習がいい経験だったかどうかについては、長期実習の前においても、後においても9割前後がいい経験だったと評価していた。しかし長期実習の前の評価に比べ、後での評価は僅かに低くなっていた。

③将来の社会福祉領域への就職について、“是非就職したい”の割合が長期実習の後、高くなっていた。反対に、“選択肢の一つとして考えている”の割合は低くなっていた。